

乳がん検診（施設）

動 向

本邦における乳がんの罹患率は大変高く、中でも神奈川県は、乳がん標準化死亡比で全国ワースト4位となっている。(18年度厚生労働省老健局老人保健課調べ) 乳がん検診は旧厚生省の指針により、87年から老人保健法に基づいて義務づけられ、30歳以上を対象に視触診が実施されてきた。しかし00年には有効性評価上、視触診だけの検診は「死亡率を減らす効果がない」との発表があり、これにもとづいて、01年4月にマンモグラフィ併用検診法のガイドラインが提示された。当協会では、それに先駆けて視触診検診法とマンモグラフィ併用による検診法の二方式を行ってきた。こうした動向に配慮して、希望者に対しては、視触診とマンモエコー併用の検診も実施してきた。そうした中、MMG併用群は平成05年度が、41.1%であったのに対し、08年度は49.1%と年々増加の傾向にある。

また弊会では、06年度より、NPO法人乳房健康研究会と共に、乳がんの早期発見・早期治療を目指し、“ピンクリボンかながわ”事務局として、その活動に積極的に取り組み、乳がん検診受診率向上と、乳がんについての知識の普及・啓発を行なっている。

方 法

19年度の本年報にては、本稿前任者は視触診単独とマンモグラフィ（以下MMG）併用検診の2方法が主で、希望者のみに超音波（以下エコー）検診を追加している如く集計してきたが、これは初期の検診方法で、実際にはエコー併用検診を近年には積極的に推進してきた。特に30歳代の若年者や40歳代や逐年検診者にはエコー検診の選択を勧めてきた。これは厚労省型の40歳代MMG2方向併用隔年検診が30%の中間期乳がんを結果し、また当施設の乳がん検診のエコーによる乳がん検出率が、最近4年間の検討で年代を問わず85%以上であったことに基づいているし、X線被爆のないエコーを検診では多く施行するべく、選択可能として来た。そのため超音波診断装置も20年より21年にかけてエラスト・グライフィー可能な最新機器に3台更新し、医師および技師も積極的に習熟に努めて来た。そのため18～19年度では、視触診単独検診をエコー併用が上回るようになったが、まだMMGの知名度が高く、MMGを選択する受診者や各種団体の被保険者が多いのは致し方ない。経過観察群が多いのは検診効率上もあり望ましくないもので、なるべく一次検診へ戻すように努めている。またこの群を3ヶ月以上とされていたことにも問題があり、来年度よりは1年以上としたいと思う。

結 果

平成20年度の受診者は21,334人と19年度より648人多い。やはりMMG併用群が49.2%と最も多く、次いでエコー併用群が19.6%、経過観察群が18.1%となり、視触診単独は13.1%とこの19,20年度と激減していて、時代の変化を表している。(表1)

要精検率は視触診群では2.79%(表3)と低値に対してエコー併用群では8.16%(表4)、MMG併用群ではこの3年間は10%前後である(表5)。若年者にもっと多くエコー併用検診を採用すればMMG併用群の要精検率は10%以下にすることも可能と推測される。精検受診率は視触診が60%台に対して、エコー併用群90%近く、MMG併用群では70～80%台であるのは、受診者の意識の差がでているのかもしれない。発見乳がんは58人で18年度の68人には及ばないが、19年度より7人多く、発見率は0.27%である(表2)。初診者と再診者がほぼ同率の視触診群とMMG併用群は0.2～0.3%台だが、エコー併用群では若年者が圧倒的に多いため0.05%台に止まっているが、40歳代や逐年受診者に行われるようになれば、増加するはずである。経過観察群26人、0.67%(表6)と多いのは当然である。発見乳がんは30歳代5例8%、40歳代14例24%、50歳代19例33%、60歳代12例21%、70歳代6例10%、その他2例4%の58例である。この内硬結は12%、腫瘍40%、MMG有所見88%、US有所見78%で触診陽性は52%である。非触知乳がんは48%で視触診では見落とされる危険がある。腫瘍径は0.5cm以下22%、0.61～1.0cm以下22%、1.1～1.5cm24%、1.6～2.0cm10%でいわゆるt-1が78%を占める。治療は手術は48例に行われ、38例79%に乳房が温存され、その内78%はSLNBであった。乳切は7例14%で残りの3例は化療または化療後の手術と不明9例と手術拒否1例である。DCISは26%、浸潤性乳管癌22%、硬癌22%、充実性乳管癌14%等である。腋窩リンパ節転移は68%陰性でn1a17%で約80%以上はいわゆる早期がんである。遠隔転移は2例3%であった。

考 察

乳がん検診は近年、視触診よりMMG併用、更にエコー併用検診へと移行していて、標準的であった厚労省の指針より更に進もうとしている。当施設でも早くから時代に対応すべく、また先に進む方向を見据えて準備して来た。しかし検診受診者の増加を図ることが必須で、ピンクリボン運動等を積極的に支援している。

関係の集計表は97頁に掲載